

# Sato Project

Sato Project

## 農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境— 「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室(加藤) e-mail:[sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



京都の大晦日の風物詩—「おけら詣り」

おけら(魔除け厄除けの草でもあるキク科の薬草)を燃やした火を、吉兆縄を用いて自宅に持ち帰り、その火で作った雑煮を食べると、一年間の無病息災がかなうとされています。

[http://news.livedoor.com/article/image\\_detail/2936754/?img\\_id=123679](http://news.livedoor.com/article/image_detail/2936754/?img_id=123679)

## 新疆ウイグル自治区・小河墓遺跡とその周辺の環境

伊藤 敏雄 (大阪教育大学教育学部)

# 新疆ウイグル自治区・小河墓遺跡とその周辺の環境

伊藤敏雄（大阪教育大学教育学部）

中国魏晋南北朝史と楼蘭の歴史を研究し、これまで楼蘭や米蘭（ミーラン）・若羌（チャルクリク）などの遺跡を見学してきましたが、今年 10 月に初めて、新疆文物考古研究所のイデリス所長等の案内で、新疆ウイグル自治区の小河墓遺跡と周辺の胡楊林や漢墓などを佐藤洋一郎先生らと一緒に見学させていただきました。

小河墓遺跡は、1934 年にベリイマンが調査して著名になった小河第 5 号墓地のことで、新疆文物考古研究所の測定によると、北緯 40 度 20 分 11 秒、東経 88 度 40 分 20.3 秒に位置し、小河の東約 4 km にあります（『新疆文物』2007-1）。

小河は、現在、水の無い干河床となっていますが、ベリイマンが調査した当時は、水がありました。1921 年に尉犁の土豪がタリム河に堰堤を築いたため、タリム河が孔雀河の干河床（クム・ダリア）に注ぎ込み、ロプ・ノールに水が戻りますが、その際、孔雀河の支流の小河にも流入したと思われます。ベリイマンによると、ところどころで断流している河流と沼沢が見られ、ウイグル人の羊飼いが葦の家に居住していた所もありました（ベリイマン 1939、図 1、2 参照）。

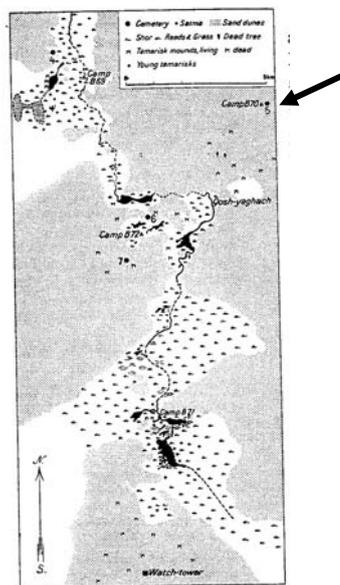


Fig. 18. The middle part of The Small River, with archaeological remains.

図 1 小河周辺の遺跡分布図

（Bergman 1939 より）

図中右上の「5」（矢印）が小河第 5 号墓。

断流している河流と沼沢が分かる。

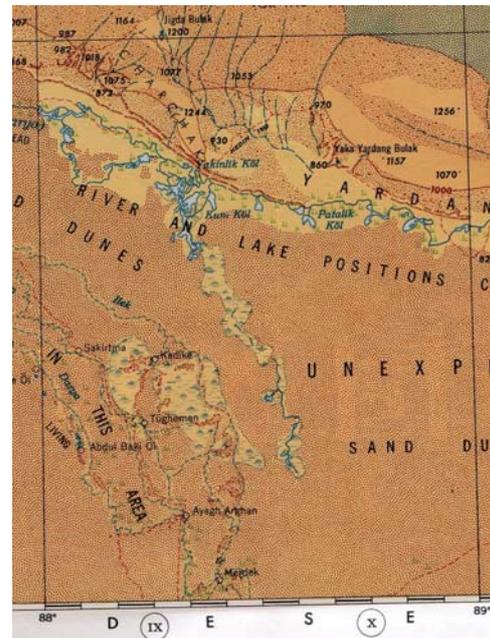


図 2 1934 年当時の小河周辺の地図

（The Sino-Swedish Expedition. Publ.47

1966 NK-45 より一部抜粋）

小河と孔雀河周辺の水の状態が分かる。

しかし、その後、孔雀河の水量が減少するとともに小河の水量も減少したと思われ、1974年の情報による地図ONCでは、孔雀河から分流した小河の初めの部分に河道がわずかに記されるのみになっており、結局、小河の水は無くなり、現在に至っています。

周知のように小河墓遺跡の木棺や墓標に幅広の胡楊材が用いられている上、遺跡の中から胡楊の葉の堆積物も見つかっていますので、当時、周辺に胡楊の大木からなる原生林が存在したことが想定されます。今回案内していただいた小河西方の漢墓（XHMⅡ、図3参照）では、大木の棺材が見あたらないように思えたのですが、『新疆文物』2007-2によると、巾30～40cm前後の側板があり、胡楊をくりぬいた棺もあります。更に今回見学できませんでしたが、その南のXHMⅤ墓地でも胡楊をくりぬいた棺が発見されていますので（図4参照）、周辺に胡楊の大木があったと考えられます。



図3 XHMⅡ墓地（『新疆文物』2007-2より）



図4 XHMⅤ墓地（『新疆文物』2007-2より）

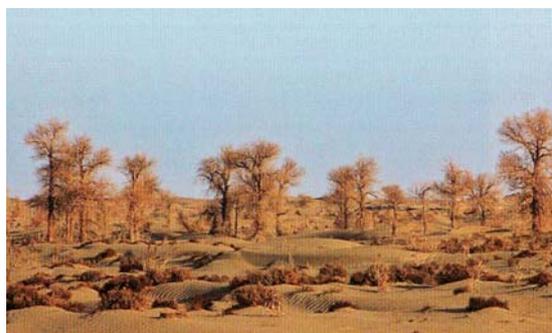


図5 小河西方の胡楊林  
（『中国文化遺産』2005-5より）

ところが、現在、小河墓遺跡の周辺で、大木からなる胡楊の原生林は確認できません。ベリィマン 1939 掲載の孔雀河南側の枯死した胡楊林の写真でも大木は見あたらず、今回案内していただいた小河西方の胡楊の原生林（図5参照）でも管見の限り大木は見あたりませんでした。今にして思うと、1988年と1995年に見学した楼蘭故城周辺の枯死した胡楊林にも大木は見あたらなかったと思います。

したがって、小河墓の時代と漢代には、周辺に大木からなる胡楊林があったが、その後、大木からなる胡楊林はその周辺から姿を消したと言えそうです。では、どこに消えたのでしょうか。大木が伐採されたり、枯れて折れたりし、残根が土砂に埋もれ、その上に新たな原生林が生じたりしたのでしょうか。あるいは、激流が発生して林や残根を流し去ったのでしょうか。謎は深まるばかりです。

また、周辺地域の気候については、小河墓遺跡の保存状況から考えると、乾燥していたと考えざるを得ません。乾燥していたが、小河などの水量が豊かだったので、その周囲で小麦などの栽培や牛などの牧畜を行って生活していたことが想定されますが、当プロジェクトの調査により、当時の生活の様子とともに、消えた胡楊林の謎や小河墓廃棄の原因などが明確になることが期待されます。